

保険相互会社をめぐるエピソード(3) 蓬来生命 太田清蔵の関連

向田邦子の『父の詫び状』に「お辞儀」という随筆が所収されている（画僧参照）。冒頭は留守番電話のエピソード。黒柳徹子の「一人連続9通話の記録」に始まり、父の不愛想な留守電、たしなみのある無名の夫人からの間違い留守電など、留守電が生活に入り込んだ時分のことを知るものにとっては、アルアルという話。

ところで、「留守電」という呼称は誰が考え出したのだろうか？英語では、Answerphoneと呼ぶが、直訳すれば「(自動) 応答電話」だ。電話主が留守云々とは関係なく、自動応答モードであるという意味で、まことに機械的な呼称である。迷惑電話防止のために「居留守電」を使っている人が多いと思われるが、年寄りには「居留守」をきめ込むことに罪悪感を覚える人が多いようだ。NHKのある番組で、「オレオレ詐欺」の類の犯罪のほとんどは「居留守電」で防げるということを報じていた。実験すると確かにそのとおりのようだ。しかし高齢者の多くは、呼びかけに応じて「留守電」を設定するようだが、すぐに「留守電」を解除してしまうので効果が薄いとのことだった。これなど「留守電」と呼ばず、「自動応答電話」と名付けておけば、高齢者が罪悪感を覚えなかったはずだ。言葉の効果は侮れない。

横道はこのくらいにして、本題に戻ろう。随筆も「お辞儀」という本題にうつる。入院した母のお見舞いに対する母の丁寧な見送りのお辞儀、そして最後に祖母の葬儀の際の父のお辞儀が描かれる。向田の名文を、筆者の言葉で要約するのは野暮なので、少し長くなるが引用させていただきたい。

「祖母が亡くなったのは、戦争が激しくなるすぐ前のことだから、35年前だろうか。私が女学校二年の時だった。／通夜の晩、突然玄関の方にざわめきが起こった。／「社長がお見えになった」という声があった。／祖母の棺のそばに坐っていた父が、客を蹴散らかすように玄関へ飛んでいった。式台に手をつき入ってきた初老の人にお辞儀をした。／それはお辞儀というより平伏といった方がよかった。財閥系のかなり大きな会社で、当時父は一介の課長に過ぎなかったから、社長自ら通夜にみえることは予想もしていなかったのだろう。それにしても、初めて見る父の姿であった。」（向田邦子『父の詫び状』文春文庫、61頁）

邦子は父の家での「暴君ぶりを嫌だ」と思っていたが、私たちに見でないところで「父はこの姿で戦ってきたのだ。父だけ夜のおかずが一品多いことも、保険契約の成績が思うにませない締結の時期に、八つ当たりの感じで飛んできた拳骨をも許そうと思った」（『同上』62頁）とある。この随筆は、子どもの「親のお辞儀をみる」時の複雑な心境が吐露されて結ばれる。ご興味のある方は原文を参照されたい。

ここで登場した「社長」は、向田敏雄が勤務した第一徴兵保険生命保険株式会社の社長である。それは誰か？ミステリーではないが、最後にその正体を明らかにする。

蓬来生命（蓬来生命保険相互会社、以下蓬来生命と略記）の創立については、『蓬来生命概観』（昭和6年9月発行）に次のように記述されている。「我社は明治34年8月15日、渋沢栄一、益田孝、古川虎之助、藤田平太郎、安川敬一郎、住友吉左衛門、太田清蔵の諸氏

を初め、全国知名の士百余名によって基金を拠出せられ、鶴原定吉氏を社長とし、粕谷義三、高橋光威の両氏を専務取締役として、京橋区新肴町10番地に創業された。

鶴原定吉は、黒田藩士鶴原道室の長男。修猷館、大学予備門を経て、明治16年7月現在の東京大学文学部（政治科および理財科）を卒業した。鶴原が社長を退任後、「樺山愛輔氏が一時経営の衝に當」ったが、大正5年には太田清蔵が社長就任した（鶴原社長時代の「保険案内」大正3年）。

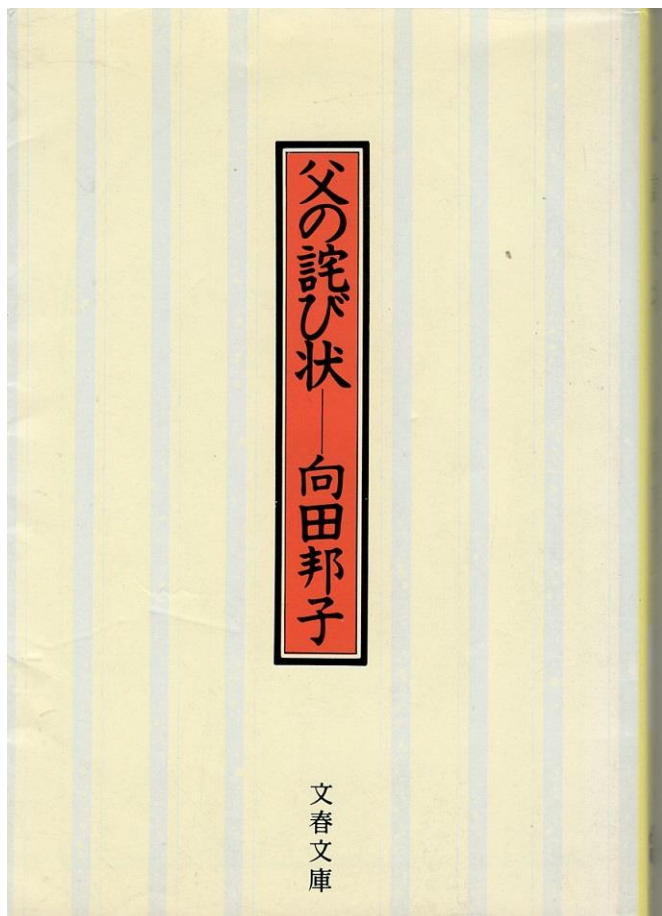
蓬萊生命の新規契約額の推移は掲載した図を参照されたい。『蓬萊生命概観』には、「太田社長就任後社業の進展著しきものあり」という記述があるが、掲載した新契約の推移をみると就任3年目ぐらい伸長したがその後落ち込んでいる。商品は「満期保険」「累加満期保険」および「終身保険」であった。「満期保険」とは養老保険のことである。「累加満期保険」とは契約者配当を保険金増額でおこなう契約と考えてよいだろう。いずれも当社独自の商品ではなく、また気の利いたネーミングも行われていなかった。相互会社であることを除けば、まさに平凡な中小生保であった。

蓬萊生命は、業容の拡大にともない、発祥の地である新肴町から、大正8年6月に京橋区銀座3丁目10番地に移転し、さらに大正11年3月には京橋区南伝馬町2丁目9番地に移転した（南伝馬町時代の「保険案内」を掲載）。その後、昭和2年4月には、発祥の地である新肴町に戻り、さらに昭和6年には銀座西3丁目3番地に近世古典様式の「鉄骨鉄筋混凝土造」の8階建（地下2階）の新社屋を竣工した（新社屋の画像を参照）。

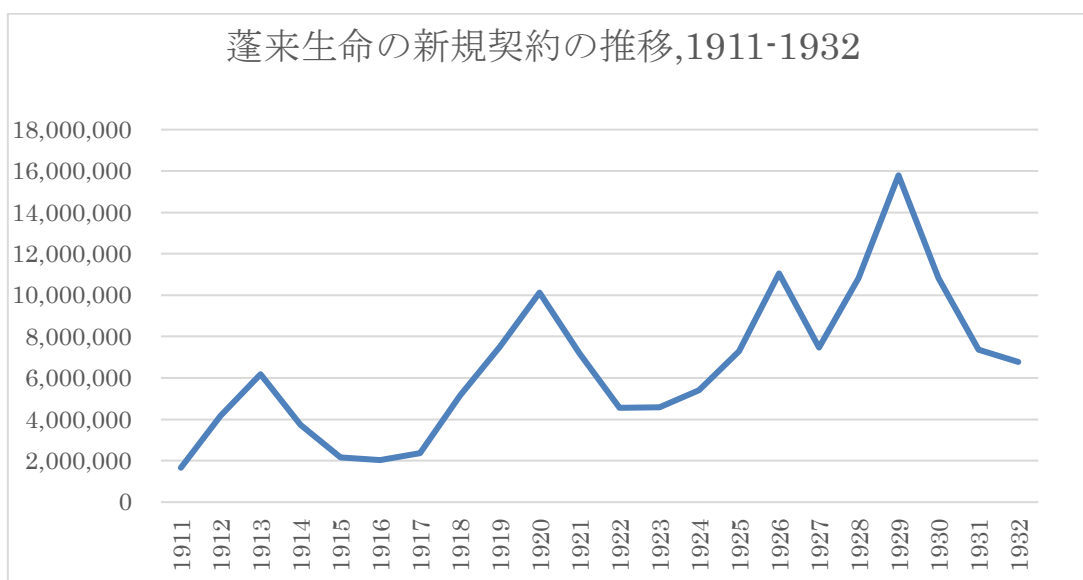
設計者の徳永庸(1887-1965)は、藤森照信『日本の近代建築』岩波新書に言及されておらず、広く知られていないかもしれない。福岡県出身で早稲田大学において建築を学び、佐藤功一事務所の主任を務めた後、1927年9月に独立した。時期的には、蓬萊生命本社の設計は、彼の比較的初期の作品に属するものである。

建築史上の評価は他にゆずりたいが、内装を見ると細部にまで手の込んだ設計がされている。たとえばホールでは、柱はシンプルなのだが、天井は過剰なくらい装飾的である（画像を参照）。この社屋は、蓬萊生命が中小相互会社の合併により消滅した後は、第一徴兵保険の本社として使用されることになった（画像参照）。戦後、東邦生命ビルとして存続したが、現存していない。


向田敏雄が第一徴兵（東邦生命の前身）に勤務していたことは知られている。第一徴兵と蓬萊生命の両社が太田清蔵に支配されていることを考えると、第一徴兵が、蓬萊生命の「売却」後に、社屋を引き継ぐことは当然のことだった。向田敏雄の母の葬儀に参列し、「父」を慌てさせ、恐縮させた「社長」とは福岡出身の実業家・政治家の太田清蔵（4代目）のことだった。太田清蔵が生命保険業界に与えた影響は計り知れないものがあるが、紙面の理由で語りつくせない。ここでは、後に脚本家として名をなした向田邦子が、祖母の葬儀の場で太田清蔵社長と相まみえたということだけを指摘して結びとする。



向田邦子『父の詫び状』文春文庫



出典：蓬萊生命「営業報告書」各年度等の集計をもとに筆者が作成。



大正三年六月二十九日改正

本社 東京市京橋區新着町拾番地  
電話 京橋一特長四四九番  
振替貯金口座番號東京二〇八三番

# 定款及約款

## 蓬萊生命保險相互會社

村多喜刷印月七年三正大

(順ハロイ)代總員社

|       |        |       |        |      |       |       |       |       |      |
|-------|--------|-------|--------|------|-------|-------|-------|-------|------|
| 田中萬次郎 | 辰野金三   | 改野耕三  | 景山甚右衛門 | 岡崎邦義 | 細川義輔  | 飯田敏昌  | 飯田義夫  | 池原謙三  | 岩原之助 |
| 永江純一  | 村野常右衛門 | 植村澄三郎 | 内山敬三郎  | 野田太郎 | 山本悌二郎 | 松本健次郎 | 牧田富次郎 | 福井準一郎 | 秋岡義一 |
| 安藤謙介  | 佐竹清三   | 野田清彦  | 佐野清彦   | 榎田兵衛 | 島田久太郎 | 櫻井喜太郎 | 宮崎喜太郎 | 平島德藏  | 菅沼達吉 |

**員 役**

|       |    |
|-------|----|
| 取締役社長 | 鶴高 |
| 取締役   | 室樺 |
| 取締役   | 浮室 |
| 監査役   | 大小 |
| 監査役   | 額  |
| 支配人   | 額  |
| 支長    | 額  |
| 博醫學士  | 額  |

原野田田山谷原  
田 祥慶桂義愛長義定  
豊一藏造文輔幸三吉

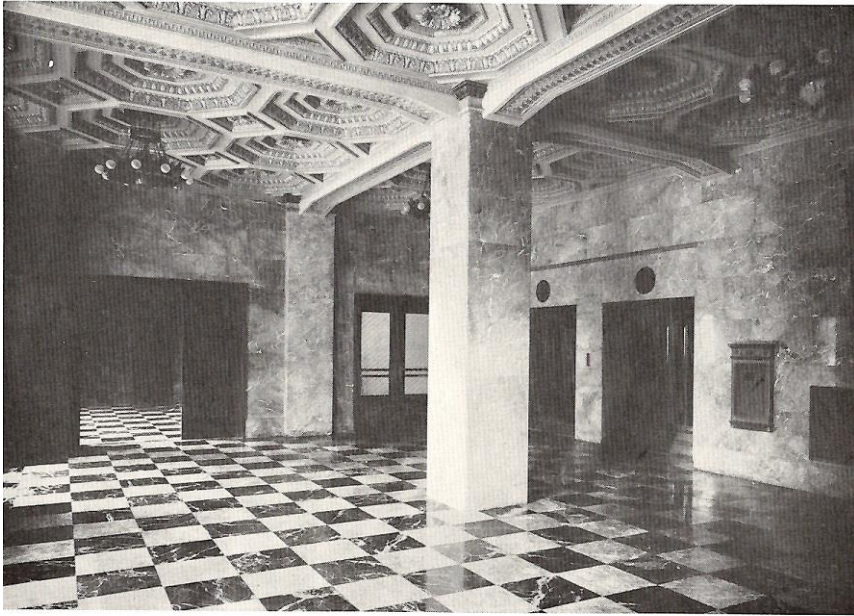
鶴原定吉社長時代の保険案内「定款及約款」大正3年。



蓬来生命「保険案内」大正11年頃。



蓬来生命の本社社屋（『蓬来生命概観』から転載）



ル ー ム

蓬来生命新築社屋のホール（『蓬来生命概観』から転載）

東京支店 東京市本町三丁目  
 神奈川支店 横浜市中区本町  
 大阪支店 大阪市東区東本町  
 名古屋支店 名古屋市中区本町  
 京都支店 京都市中京区本町  
 福岡支店 福岡市中区本町  
 仙台支店 仙台市青葉区本町  
 金沢支店 金沢市本町  
 宇都宮支店 宇都宮市本町  
 宇高支店 宇高市本町

東京支店 東京市本町三丁目  
 神奈川支店 横浜市中区本町  
 大阪支店 大阪市東区東本町  
 名古屋支店 名古屋市中区本町  
 京都支店 京都市中京区本町  
 福岡支店 福岡市中区本町  
 仙台支店 仙台市青葉区本町  
 金沢支店 金沢市本町  
 宇都宮支店 宇都宮市本町  
 宇高支店 宇高市本町

東京市本町三丁目三番地  
**第一徳兵衛株式会社**

創 業 明治三十一年  
 總 資 産 一億三千七百四十餘萬圓  
 突 入 者 八十七萬九千餘人  
 保 險 金 一千五百三十餘萬圓  
 支 拂 額 一四、一六一、〇〇〇圓

社 業 近 況 (昭和十一年末)  
 加入者 八十七萬九千餘人  
 總 資 産 一億三千七百四十餘萬圓  
 突 入 者 八十七萬九千餘人  
 保 險 金 一千五百三十餘萬圓  
 支 拂 額 一四、一六一、〇〇〇圓

第一生命の本社社屋（「保険案内」の一部）